

## 英国の EU 国民投票と歴史家たち

木畑 洋一

(成城大学法学部教授・東京大学名誉教授)

EU への残留か EU からの離脱かをめぐる英国の国民投票が目前に迫ってきた。世論調査の結果では両派が伯仲しているが、英国人の好きな賭けでは、残留側が優勢になっているようである。激しさを増している両派のキャンペーンで中心となっているのは、何といても将来のイギリス経済がどうなるかという問題であるが、5 月末には、25 日付の『ガーディアン』紙に掲載された 307 人の歴史家の連名による「EU 離脱論者 (Brexiters) への歴史からの教訓」という投書が話題となった。サイモン・シャーマやニール・ファーガソンといったメディアへの露出度がきわめて高い面々をはじめ、著名な歴史家を多く含む投書者たちは、「私たちは、英国史とヨーロッパ史の歴史家として、英国がヨーロッパでかけがえのない役割を過去に演じてきたこと、将来も演じるであろうことを信じる。」と、残留に賛成するよう国民に呼びかけた。英国と EU との関係についての議論が、英国と大陸ヨーロッパとの長期的関係をめぐる歴史認識と密接に結びついていることを、この投書は改めて想起させたのである。

ヨーロッパ統合への英国の関与の是非を、歴史を遡って論じようとする試みは、これまでもさまざまな形で行われてきた。古い例を一つだけ挙げておこう。英国が EC に加盟して統合ヨーロッパの一員となったのは 1973 年であったが、加盟が決定した 72 年に出版されて評判となったポール・ジョンソン(日本でも知られたジャーナリスト)の『沖合の島人たち』という本は、ローマ帝国時代以降の歴史を通して存在してきた独立派とヨーロッパ派ともいべき二つの潮流の間の抗争で、ほとんどの時期に優勢を保ってきたのは英国を大陸ヨーロッパとは異なる存在と見る独立派であったと論じ、その精神を引き継いで EC には加盟すべきでないと言いたのである。

今回の国民投票をめぐる歴史家たちの論戦は昨 2015 年から加熱してきたようにみえる。EU 離脱に賛成する歴史家たちのグループ「英国のための歴史家たち」を率いる中世南欧史、地中海史を専門とするケンブリッジ大学のデイヴィド・アブラフィアが 2015 年 5 月に一般向けの歴史雑誌『ヒストリー・トゥデイ』に書いた「ブリテン——ヨーロッパとは別か、ヨーロッパの一部か？」という短い論説が、その引き金となった。このなかでアブラフィアは、英国が大陸ヨーロッパに歴史的に関わってきたことは認めながらも、英国にはヨーロッパの諸国にはない独自の一貫した歴史が中世以来存在してきたとして、法制度、議会制、君主制などをあげ、さらにナショナリズムやファシズム、反ユダヤ主義、共産主義といったものも、ヨーロッパ諸国におけるような強さにならなかったと、大陸との違いを強調したのである。

これに対し、ギャレス・ステッドマン＝ジョーンズなど前述の『ガーディアン』への投書にも署名することになる人々を相当数含む 300 人近い歴史家たちが、「英国のための歴史家たち」に宛てた公開書簡(「英仏海峡の霧、孤立した歴史家たち」)を發した。彼らはそこで、英国の歴史的一貫性なるものは幻想であり、「英国の過去はそれほど立派なものでも独特のものでもなかった」と断じ、英国とヨーロッパの違いを強調することは、イギリス史を貧しくすると主張した。残留支持派と離脱主張派の歴史認識の違いは、このような形で示されたのである。

ただし、両者の主張を折衷する議論も出されてきている。今回の国民投票を意識して刊行された歴史書として最も本格的な作品と思われる、ケンブリッジ大学の近代史家ブレンダン・シムズの『ブリテンのヨーロッパ: 衝突と協

力の 1000 年』という本がそれにあたる。シムズは、英国は常にヨーロッパの一部、「大陸の一片」であったと論じ、大陸ヨーロッパとのつながりをまず強調する。しかし同時に彼は、英国がヨーロッパのなかで独自の存在だったことをも同じように強調するのである。ちなみにシムズは、昨年の公開書簡にも今年の投書にも名前は連ねていない。

英国と大陸ヨーロッパとの関係をめぐったこうした歴史意識の違いが、英国の選択にとってどれほどの現実的な影響をもつかについては、人によって見解が分かれるであろう。筆者の場合、ヨーロッパ統合に対する英国の消極的姿勢の底に、大陸ヨーロッパと切っても切れない関係を一貫してもってきたにもかかわらず、世界に広がる帝国を擁したことで、ヨーロッパの一国としてのアイデンティティを薄めてきたという歴史的背景があることを、これまで折に触れて指摘してきた。英国と大陸ヨーロッパの関係について、ひいては統合ヨーロッパへの英国の関わり方について、歴史意識がもつ役割は小さくないというのが、筆者の考えである。国民投票の結果がどのようになるにせよ、ヨーロッパへの関わりをめぐる英国の人々の歴史意識には、これからも注意していきたいと思っている。